

149. 中屋吉蔵 (初代)

真室川町歴史民俗資料館長 梁瀬 平吉

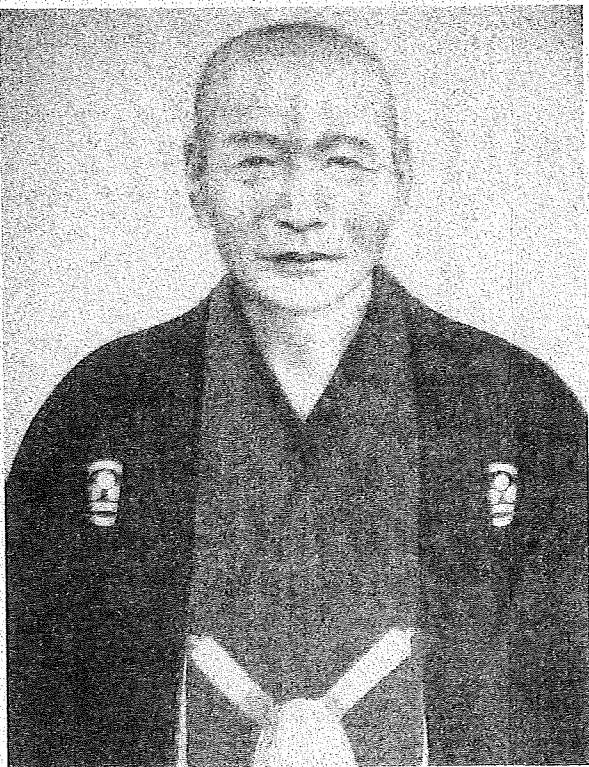
▽やなせ・へいきち氏は1949(昭和24)年真室川町生まれ。国語科教師として新庄東高に40年間勤務した。同高同窓会顧問。真室川歴史研究会、新庄古文書の会の会員。戦前から戦後にかけて活躍した真室川町出身の作家真室三郎の作品集の編集を手掛けた。



新庄東高教師として活躍したやなせ・へいきち氏

市出身の鋸鍛冶で、後に中屋製鋸工場を創業する中屋吉蔵である。深い山林に囲まれた真室川町及位に工場を構えた吉蔵の窓鋸は昭和の時代、一世を風靡した。全国的に「中屋」と刻印された鋸でなければ売れ上げは伸びず、名前を中屋に変えた工場まで出るほどだった。

1872(明治5)年、山形市の旧鍛冶町に生まれた吉蔵は、生家渡辺家の生活が苦しく11歳の時、市内の浄光寺にあずけられた。住職の留守中、丹精込めて育てられていた池の鯉をつかまえて境内で焼いて食べるなどわんぱくな子どもだったようだ。それで



窓鋸の実用性を高めた鋸鍛冶の中屋吉蔵

も住職は何か考えるところがあつてのことか、叱ることもせず、かわいがつたという。ところが吉蔵は寺を逃げ出し、天童市の鋸鍛冶、中屋九兵衛のもとに弟子としてあずけら

れ、10年間、22歳まで鋸鍛冶の腕を磨いた。九兵衛には吉蔵よりも三つ年下の娘よしがいて、恋仲となり、年季明けと同時に駆け落ちして結婚。翌年には長男吉太郎を授かった。吉蔵、家

田屋吉蔵(なかや・きちぞう) 鋸(のこぎり) 鍛冶。1872(明治5)年、山形市の旧鍛冶町に生まれる。本名渡辺吉蔵。84年から10年間、天童市の鋸鍛冶、4代目の中屋九兵衛(本名伊藤秀次)の下で修業。年季明けの94年、九兵衛の娘よしと結婚する。秋田・院内や金山町の鋸製作所などに勤め、95年長男吉太郎誕生。96年、及位村(現真室川町)の助役柴田伝七の世話で村で鋸作りを始める。1901年、山形市に移った後06年、再び及位に移住し、11歳になった長男吉太郎とともに鋸製作に取り組んだ。21(大正10)年、窓鋸(まどのこ)の実用化に成功。東北や北海道各地に鋸の通信販売を開始する。31(昭和6)年、火災で工場が焼失し近くに再建。33年、孫の伊左衛門も鋸製作に加わるようになる。このころ、山林用の大型鋸だけで年間1700枚を生産していた。35(昭和10)年、62歳で死去。

「窓鋸」の実用化に成功

はじめ、各地を転々とする。院内(秋田県湯沢市)の古河銀山や金山町の鋸製作所に勤め、一時期は山形市の実家に戻ったりもした。

及位を拠点に

その吉蔵が1906(明治39)年、鋸生産の拠点に及位を選んだのは、羽州街道沿いであつたことや、04年に新庄から院内までの国鉄が開通したことだけが理由ではない。秋田県境の広大な山林を背景に、山と人が深く結び付いていたことにある。

山の神の勧進 米一石一斗五升 賜れ賜れ 亭主殿 米蔵金蔵 建つように この家の身上 のほるように 繁盛 繁盛

毎年旧暦3月3日、午前0時を過ぎると、真室川町では子どもたちの素朴な歌声が聞こえてくる。一番大将と呼ばれる15歳の男の子を筆頭に、小中学生の男の子たちが、新しく山の神社の祠に奉納される木製の「榎体」を持って集

既存に飽き足らず、改良を重ねたことは、画期的な技術革新だった。

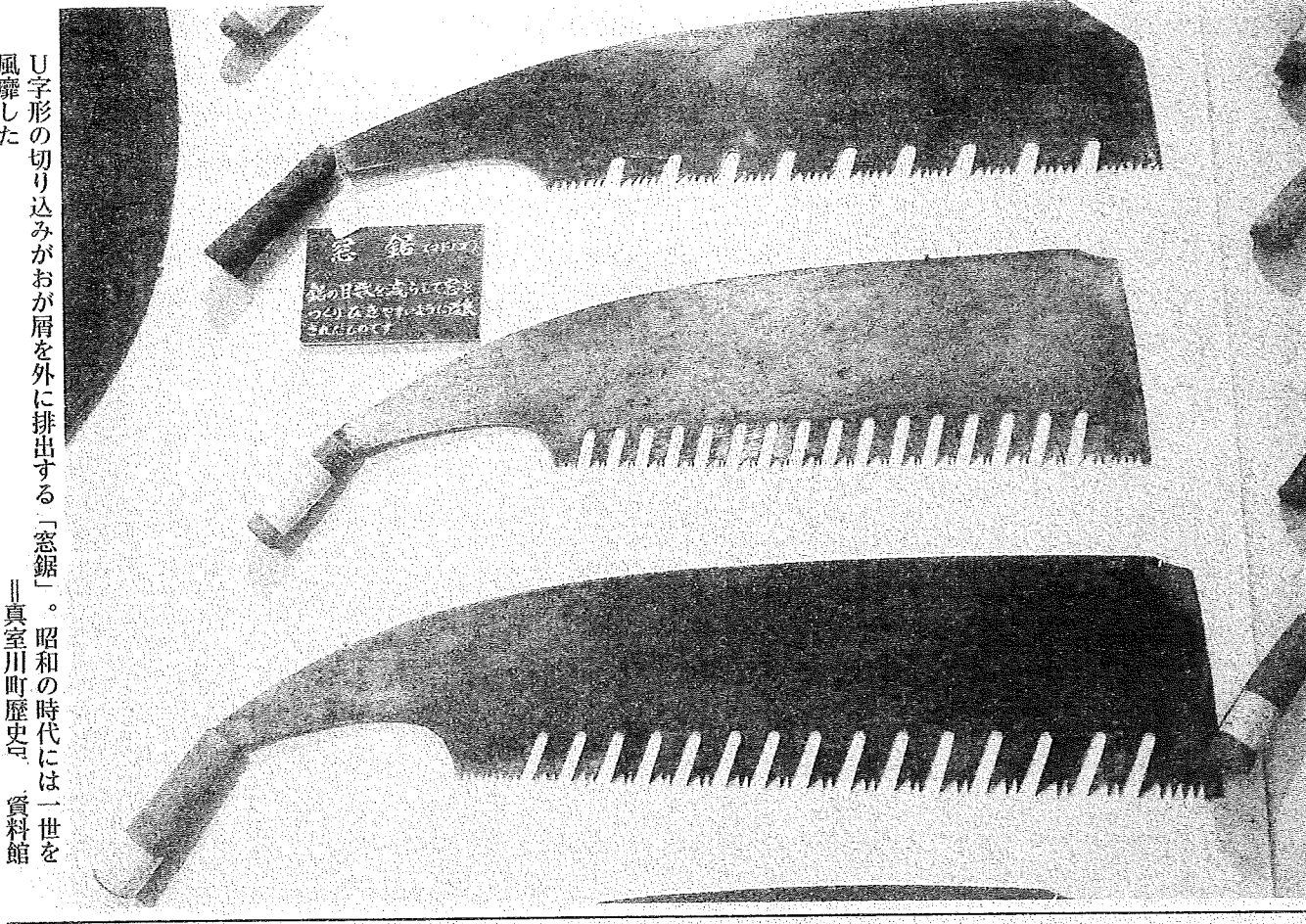
及位では、木の伐採、刈り払い、杉などの植樹を行う「山子」や、原木を板や柱に仕立てる職人「木挽」の仕事に多数の人々が従事していた。木挽は極めて専門性が高く、収入も良かったといわれている。集落の中には今も「こんびき」といった屋号の家が数軒残っている。吉蔵はこの土地に移り住んだことで、その才能を開花させることにな

妻、幼い長男と共に及位に移住したばかりの吉蔵は、毎日の暮らしも事欠くど底の貧乏生活を送った。鋸を作るにも、材料もない、金もない。鋸1枚の注文にも応じかねるほど。半額の手金を先に受け取り、1枚分の鋼を仕入れ、ようやく納品するという繰り返しだった。そんな中で吉蔵は、木挽から窓鋸に関する話を耳にする。

美男で多趣味

吉蔵の孫で、3代目中屋蔵を襲名した渡辺伊左衛門妻セツ子は、初代吉蔵についての評価をこう伝えている。「美男子で、多趣味、芸、機転が利いてウイット富んだ当意即妙の応答ができる人だった。幼いころの行動にもその片りんが現れているようにも思われ、セツ子は「人を引き付け、力があった」とも言う。彼の技術を踏襲するだけに絞らない、大胆なひらめきを鋸を実用化した吉蔵に思いはせる時、そこには生命がエネルギーが満ちていると感じられる。

えながら試作を重ねていたそうして使い勝手の良い窓鋸を生み出すことに成功する。1921年(大正10)年、及位に移住して16年目のことだ。既存に飽き足らず、改良を重ねたことは、静かな山にの出来事とはいえ、画期的な技術革新だった。吉蔵が考案した窓鋸には、おが屑をためこんで外に掃き出す「窓」に加えて、いろいろな工夫が施されている。刃の数を減らして、少し短い鋸を配置した。掻き刃は、ミの作用をする。切り刃に、おが屑がたまりやすくなるように、その切り込みの部分を、掻き刃が通ることによって削り取る。切り刃、掻き刃に統一された窓が、おが屑を外に排出する。巨木の伐採が円滑に行われるメカニズムである。これらの部分の位置や向きなども絶妙だったのだと考えられる。



U字形の切り込みがおが屑を外に排出する「窓鋸」。昭和の時代には一世を風靡した。真室川町歴史民俗資料館